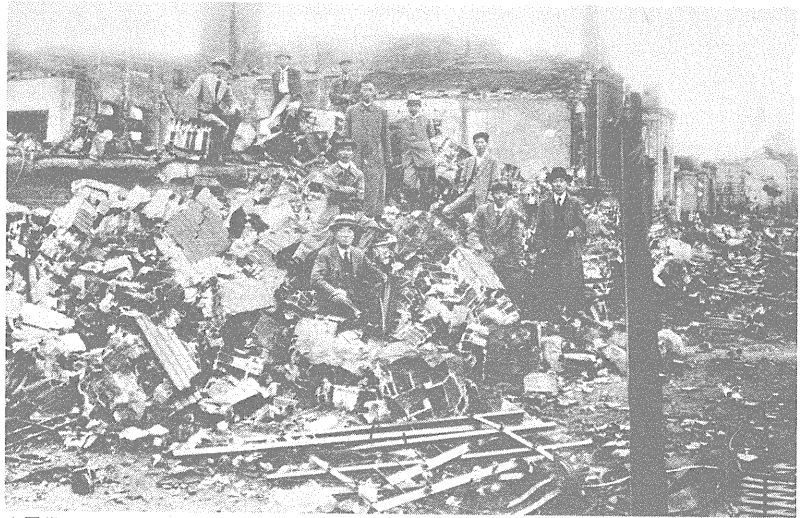


関東大震災 燃えさかる横浜市内 その被害は横浜市の95%に及んだといわれる (横浜市広報課提供)



関東大震災の惨状を報じた新聞



大震災によって瓦礫の山と化した当行本店

仮借ない試練

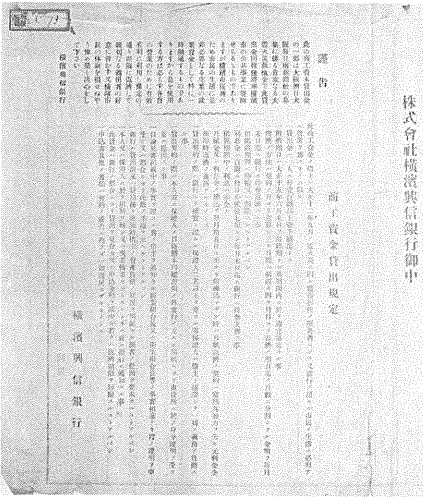
厳しい責務を負って発足した当行にさらに追打ちをかけたのは、大正12年の関東大震災とそれに続く昭和2年の金融恐慌であった。未だ基盤も固まらない時期に受けた傷手は大きく、当行は業容の縮小を余儀なくされ、七十四銀行の整理も当初予定した昭和5年の第2次整理で結末をつけることは困難となり、さらに10年にわたる忍耐を強いられることになった。



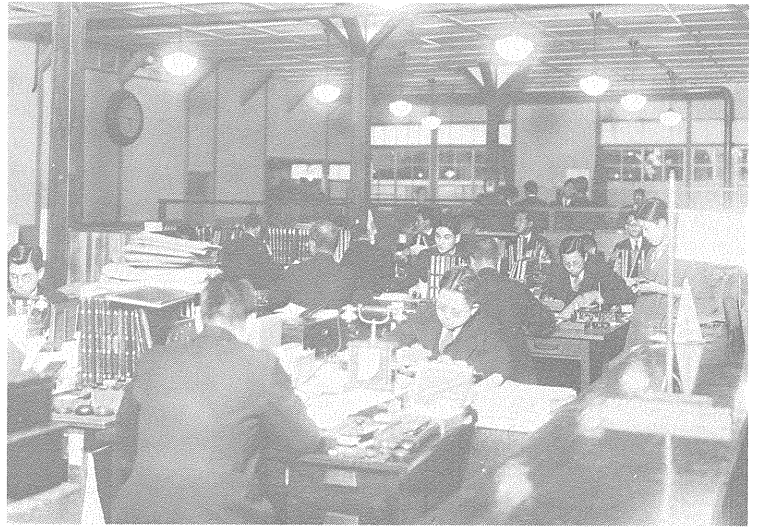
震災後に急造された本店仮建物 ここで約6年間営業した



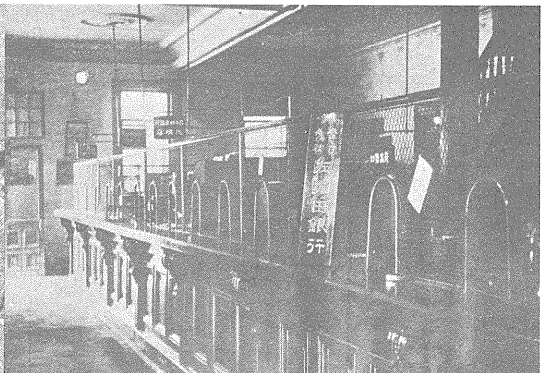
昭和4年、震災後の急造建物からようやく体裁整った本店仮店舗へ移転した ここで昭和13年まで約9年間営業した



横浜市の寄託に当行の資金を加えて実施された震災復興資金融資の申込書



仮店舗の本店営業場



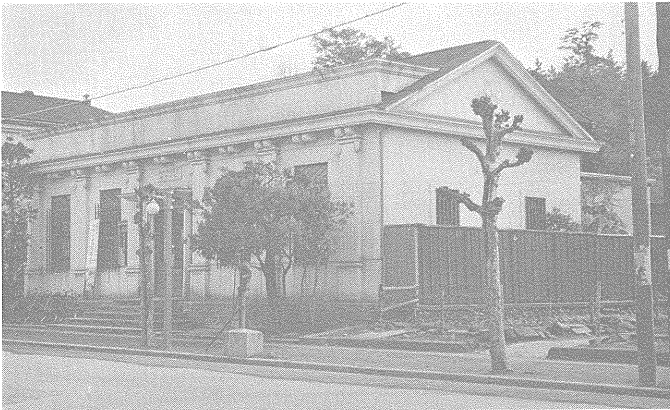
大震災当時、横浜最大の銀行であった左右田銀行は、震災の傷手から休業し、昭和2年当行に営業譲渡すると同時に整理を委託した 左右田銀行本店営業場(上)と預金払戻初日の状況(左)



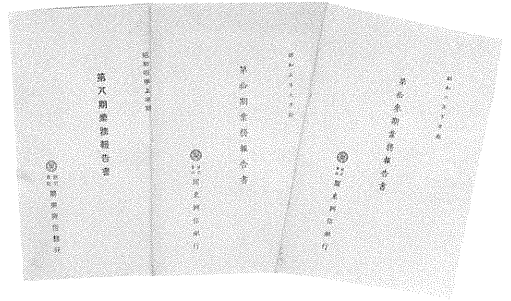
昭和3年4月、合同によって引継いだ第二銀行横須賀支店の店舗外観(右)と営業場(上)

銀行合同の中心に

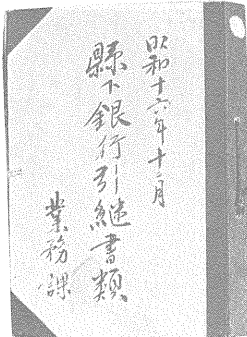
昭和3年の銀行法の制定・昭和10年代の一県一行の推進により県内も銀行合同の波に巻込まれた。その間実力を蓄えた当行は県下の銀行合同の中心となり、昭和元年に40を数えた県下の銀行の約半数19行を直接・間接に合同した。その結果、昭和20年の県下の本店銀行は当行と横浜正金銀行のみとなり、当行は県下全域に店舗網を拡大するとともに全国普通銀行中の19位に躍進した。



昭和7年11月、合併によって当行藤沢支店となった関東興信銀行本店

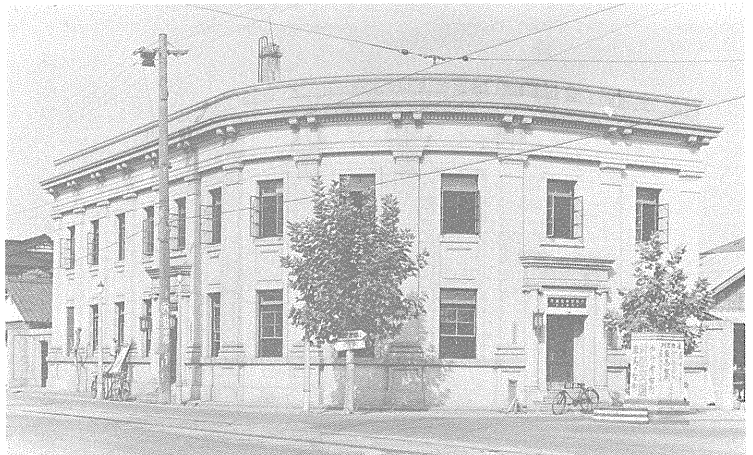


関東興信銀行の営業報告書



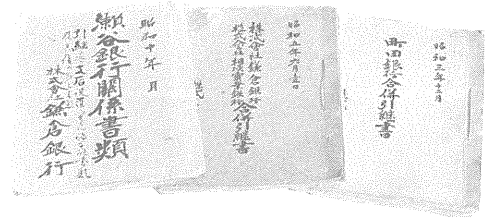
昭和16年12月の6行合同書類

6行合同によって引継いだ明和銀行本店、昭和49年まで当行小田原支店として使用された

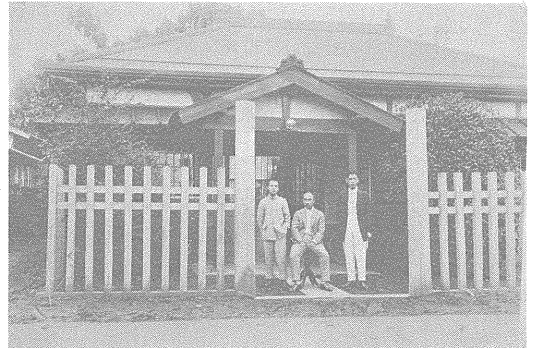
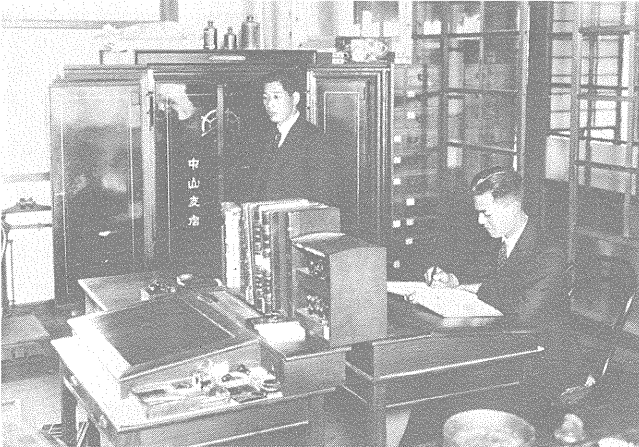




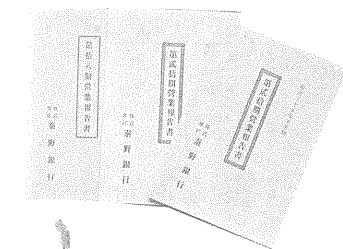
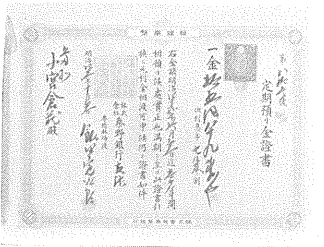
6行合同によって引継いだ鎌倉銀行本店 現在は改装して鎌倉倶楽部として使用されている



鎌倉銀行が町田・相模実業・瀬谷の各行と合同した際の引継書



瀬谷銀行当時の中山支店外観(上)と営業室(左)



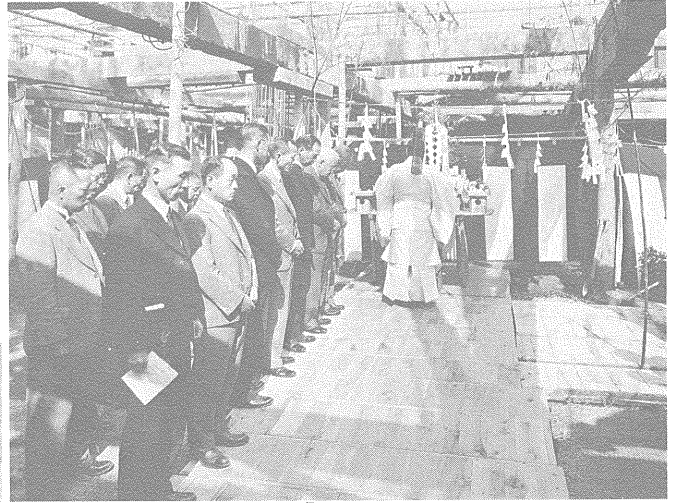
秦野銀行の定期預金証書と営業報告書



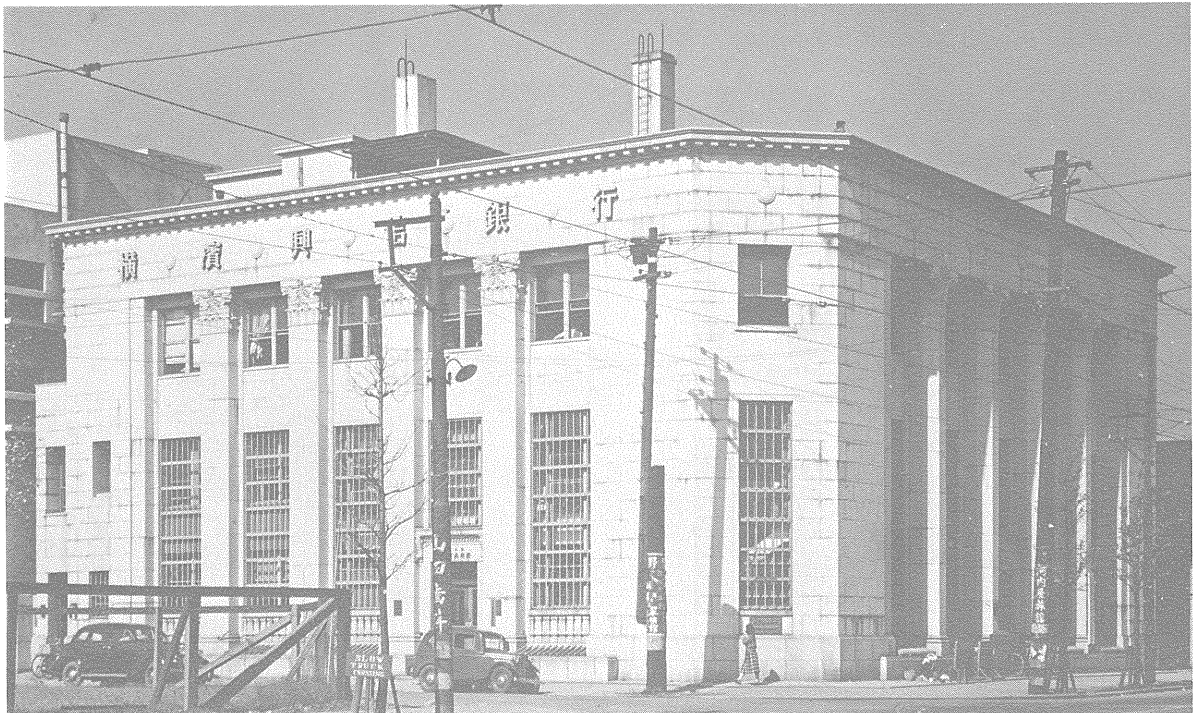
6行合同によって当行秦野支店となった相模銀行本店

戦時下の当行

国家目的遂行のための金融統制は戦火の拡大に伴います。ますます厳しさを増し、銀行は貯蓄増強に努めて国債消化に協力することが最大の使命となり、独自の資金運用すらままならない状態となった。こうした情勢のなかで、当行は関東大震災によって焼失して以来待望久しかった本店新築を果たし、地道な努力を積重ねながらその地位を高めた。



大正12年の大震災以来の懸案であった本店新築は、昭和13年ようやく実現のはこびとなり、長期間にわたった仮店舗住いに終止符を打った地鎮祭(左)と上棟式(上)



昭和13年11月、住吉町に新築なった本店 以降昭和35年まで当行本店として使用された